

亀甲文鏡の変遷

高尾 将矢

亀甲文鏡は 14 世紀に出現した鏡背に亀甲文を配置する鏡である。本研究では亀甲文鏡の出土・伝世品を集成し検討した。その結果、亀甲文は以下の変遷を辿ることが明らかとなった。

花文亀甲地文（14 世紀）

文様は変化に富み中央の連珠の数が異なるものや、斜線を組み合わせたものが認められる。いずれも花文を模したものであると考えられる。時代が下ると外区に幾何学文様を配する擬漢鏡へと変化する。谷森眞男旧蔵の永和三（1377）年の紀年銘鏡がある（広瀬 1938）。

菊亀甲地文（14 世紀）

中央の文様が花文から菊に変化する。広瀬都巽旧蔵の嘉暦三（1328）年の紀年銘鏡がある（広瀬 1938）。

三盛菊亀甲文（14 世紀）

鏡背を埋め尽くす地文から三盛亀甲散らしに変化する。中央の文様は引き続き菊である。山形県出羽神社鏡池出土鏡に類例がある（寺田 1934）。

三盛花菱亀甲文（15 世紀～ 17 世紀初頭）

中央の菊が花菱に変化した三盛亀甲を散らす。千葉県香取神宮、國學院大學服部コレクションに類例がある（内川・中村 2006）。

花菱亀甲地文（16 世紀中葉～ 17 世紀初頭）

花菱亀甲文で鏡背を埋め尽くす。紐は亀紐で双鶴が接吻する。愛知県熱田神宮伝来の天正十（1582）年、文禄三（1594）年の紀年銘鏡がある（広瀬 1938）。

単体の亀甲文（16 世紀後葉～ 17 世紀初頭）

16 世紀後葉の小型和鏡と安土桃山時代の鏡胎が薄く扁平で素鈕、縁は蒲鉾形の鏡に認められる。後者は平安時代の多度式鏡を模した復古的な形態。いずれも作りは粗雑である。

花菱亀甲地文柄鏡（17 世紀以降）

文様は前代の流れを組み、鏡背を花菱亀甲文で埋め尽くす。紐は消失し形態は円鏡から柄鏡へ変化し縁高は低くなる。銘を陽鑄する。稀に円鏡も認められる。

【引用文献】

内川隆志・中村大 2006『服部和彦氏寄贈資料図録Ⅰ 和鏡・柄鏡』國學院大學考古学資料館
寺田密次郎 1934『羽黒山古鏡圖譜』出羽神社
広瀬都巽 1938「扶桑紀年銘鏡圖説」『大阪市立美術館学報』1 大阪市立美術館

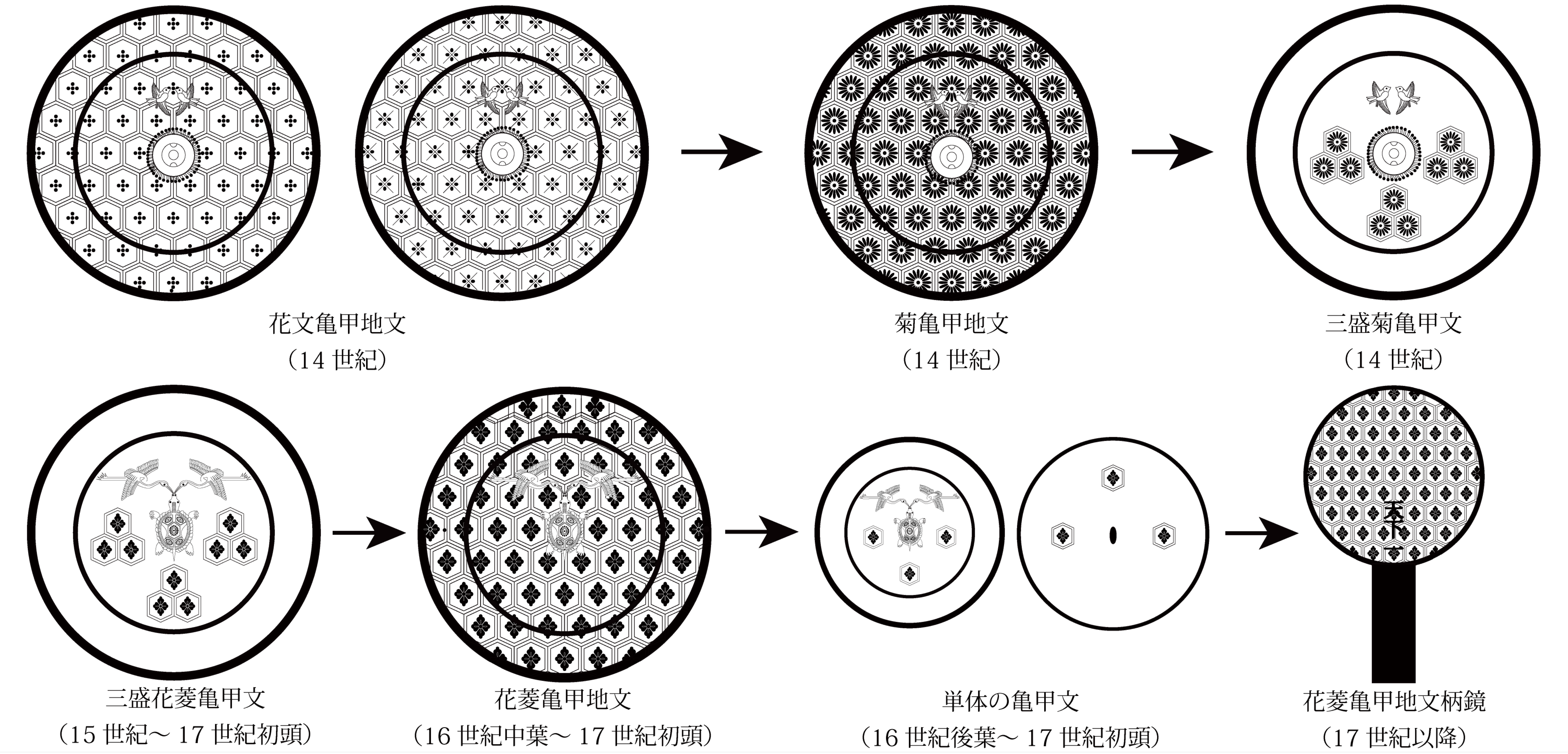


図 1 亀甲文鏡の変遷図